

ジョセフィーヌとおばあち
やんと赤ずきんちゃん

hanaminami

赤ずきん

むかしむかし、あるところに、とても大きくてふしぎなクジラがいました。

どこがふしぎかというと、ほかのクジラよりも真っ白で、大きくて、真っ青なお空で泳いでいます。

そのクジラは「ジョセフィーヌ」といい、晴れたお空にぷかぷかと浮かびながら、雲にまじって人間を見ているのが大好きでした。

真っ白で大きなクジラのジョセフィーヌは、今日も晴れたお空から地面を見ていました。

1. あかずきんちゃん

むかしむかし、あるところに、真っ白で大きなふしぎなクジラがいました。

クジラの名前はジョセフィーヌ。

大きな体をぷかぷかとお空に浮かべて、今日も森の中を歩く小さな女の子を見つけました。

「おばあちゃん、だいじょうぶかなあ？」

耳のいいジョセフィーヌは女の子の声が聞こえました。

『今日はこの子を見よう』

ジョセフィーヌはぷかぷかと女の子の上をついていきました。

その女の子は森のはじっこにある家から出てきました。

小さな家で（もちろんジョセフィーヌから見ればみんな小さな家ですが）、屋根が真っ赤で、お庭にはお花がいっぱい咲いているかわいい家です。

女の子はそのまま森の中の小さな道を歩いています。

「るんるんるん〜」

おや、木の陰から誰かが女の子を見えています。

ジョセフィーヌは誰が見ているのかが気になったので、ぷかぷかと動いてみました。

木陰にはすごい大きい狼がいました。

目が大きくて、耳が大きくて、口が大きくて、少しよだれをたらして、女の子を見ていました。

『あぶない！』

ジョセフィーヌはそう叫びましたが、お空からだ声が届きません。
どきどきしながらジョセフィーヌは女の子と狼を見ていました。

狼は、女の子の前に出ると、「あかずきんちゃん、こんにちは。いい天気だね。どこに行くの？」
とやさしい声で話しかけています。

思ったよりもやさしい話し方なので、最初はおどろいたあかずきんちゃんも狼にあいさつをしました。
「こんにちは。今日はおばあちゃんのお見舞いに行くのよ」

狼はおそろいたようにこういいました。
「でもお花を持っていないじゃないか？」
「おばあちゃんはお花が好きだったんじゃないかい？」

あかずきんちゃんは泣きそうな顔で、「おうちのお花を持っていこうと思ったけど、お母さんにだめって言われたの。」
「お花を抜いたらかわいそうでしょ？って言ってたの」

狼はやさしい声で、「この森にお花がいっぱい咲いているところがあるんだ。場所を教えてあげるからおばあちゃんにお花を持っていったらいいよ」
「きっと喜ぶよ！」
と言うと、あかずきんちゃんはうれしそうに「うん」と言い、狼の指差す方向に向かいました。

ジョセフィーヌはあかずきんちゃんの歩く先に、大きな広場と、一面の真っ赤なお花畑があるのを見つけました。

『いい狼もいるんだなあ』

あかずきんちゃんは、お花畑で一生懸命お花を摘んでいます。
赤いお花。黄色いお花。紫色のお花。
両手にいっぱい集めている姿を見たジョセフィーヌは、お花のにおいを最近かいでいないことを思い出しました。
『お花ほしいなあ』
ぷかぷかお空に浮かぶジョセフィーヌには手が届きません。

ふと森に目を戻すと、狼が女の子の歩いていた道の先にある小さな家にいました。
狼はドアに向かってなにか言っていますが、声が小さくてジョセフィーヌには聞こえません。
『あれあれ？』
狼はドアを開けて中に入ってしまった。

その時、狼が中に入った家から、
「ぎゃああー」
という声が聞こえてきました。

ジョセフィーヌはドキドキしながら、
（『もしかしたら誰か食べられちゃった？』）
と思いました。

あまりにも大きな叫び声だったので、お花を摘んでいたあかずきんちゃんにも聞こえたみたいです。
「ん？」
と一瞬顔を上げて、ジョセフィーヌのほうを見ました。

ジョセフィーヌは、お空の高いところにいるので、みんなには雲にしか見えません。
でも、ちょっとドキドキしました。
（『恥ずかしい』）
ジョセフィーヌは、誰かに見られると恥ずかしくなって、ちょっとだけピンクになってしまいました。

「あ、早くおばあちゃんのところに行かなきゃー」
あかずきんちゃんはお花を両手にいっぱい持って、もとの道に戻って、進みだしました。

『ふう』
あかずきんちゃんに自分のことがばれなくてほっとしたジョセフィーヌは、また森のほうを見ました。

すると森の奥のほうに一人のりょうしがいました。
りょうしは、片手にウサギを持ちながら、さっき叫び声がした方を厳しい顔で見えています。

『りょうしさん！あっちだよ！狼がいたよ！』
ジョセフィーヌは叫ぶと、りょうしは
「どこから声が聞こえるんだ！？」
とおどろいています。
（『恥ずかしいから見つけないでー』）
ジョセフィーヌはそう思いながらも、
『いいから助けてあげてー』
といました。

りょうしはジョセフィーヌの声を聞いて、さっきの叫び声が聞こえた家のほうに向かいました。

ジョセフィーヌはほっとして、こんどはあかずきんちゃんの方を見ました。
するとあかずきんちゃんはさっきの家に入ろうとしているところでした。

『あーぶーなーいー！』

ジョセフィーヌは大声で叫びましたが、あかずきんちゃんは「おばあちゃんー」とうれしそうに家に入っていきます。

．．．．「ぎゃあああー」．．．．

ジョセフィーヌはなきそうになりました。

『あかずきんちゃんも、食べられちゃった．．．．』

その時、叫び声を聞いたりょうしが、あかずきんちゃんのおばあちゃんの家の前に着きました。

じっと中を見ているりょうしは、手に持った拳銃で

〈パンッ〉

と家の中のなにかを撃ちました。

りょうしは家の中に入り、しばらくたつと．．．．。

「たすかったー！」

という声が聞こえました。

『よかった。助かったんだー』

ジョセフィーヌはそう思いました。

しばらくすると、煙突からモクモクと煙が出始め、家の中から楽しそうな声が聞こえてきました。

．．．．．

夜遅くまで楽しそうな声が聞こえていました。

月夜の晩、遠くのほうから狼の鳴き声が聞こえてきました。

「．．．．ワオオオオオン．．．．」

ジョセフィーヌは狼の言葉が話せたので、何を言っているのかわかりました。

それは、

「お腹がすいたよママー」

という叫び声でした。

どこかでお腹をすかせた子供の狼がいるようです。

おしまいおしまい。